

老いて、伴侶のいないカツは孤独の中にいた。同居している家族はいるしお喋りを楽しむ友人もいるのだが、老人の孤独はそんなことで拭い去れるものではない。孤独とは馴染んでいたのに：。

しかし、そんな孤独は甘えの変形だったのだ。身体がなくなってしまうような不安感からくるのか、それとも、病気で脳の一部がどこかに迷い込んでしまったのか、初めて味わう、まるでただ一人、異次元の世界に引き込まれてしまったような孤独に慄きながら、カツは思っていた。「私は、愛する人の人生の節目は、この目でしっかりと見届けたいの。私が見たからといって

：まだ生きているのに、薄情なもんだ！」何をしているのか、カツの頭の上でカチャカチャと金属が触れ合うような音をさせながら、最後は腹立たしげに信吾が言った。

「お忙しいから。二人とも」「忙しいって、二人とも車で二十分もあれば来られるのに！しかし、ま、考えようだ。何もせんのにうるさいだけの小姑よりは、あんな方がこっちとしては遣り易いな……ここら辺りでいいか？ 栄養剤ぶら下げる所」

「うん、ありがとう。そこでもいい」満足げに微笑む文恵の顔が、ありありとカツの目に浮かぶ。相も変わらず仲がいい夫婦だわい、と

何がどうなるものでもないけれど、見ずにはいられない。誰でもそうだと思っていたけど、そうでもないのね。……今日のバアちゃんの退院も、二人には知らせなくてもよかったみたいね」嫁の文恵の声が聞こえた。部屋に入ってきたようだ。カツを襲っていた不気味な闇は、瞬時に消えた。表まで見送っていただけか、カツはほっとしながらそう思い、人の気配は温かいな、と心の中でつぶやいた。

「姉さんや薫は、人格が喪失した時点でその人間は終わったと思っっているんだろう。自分の中で、別れはもう済んでいるって感じだったな。：

カツは心の中で苦笑いを浮かべた。カツは信吾のように、薫と峰子の言葉をそれほど腹だたしくは思っていなかった。自分が植物状態なら、しかたないと思えたのだ。

(二)

「優しくしてくれるばかりが、親孝行というわけではない」カツはそう思って、遠い日を思い浮かべた。

その日は、電話が朝から掛かり通しだった。朝刊に、薫の晴れがましい記事が載っていたのだ。県下で初めて、三十代の教頭誕生！ そんな

大きな見出しの横に、理性に溢れた美しい薫の写真が載っていた。

カツは、親戚中の人から電話を貰い、出会う人からしばらくの間、祝福の声を掛けられた。

子供の晴れは親の晴れ。カツは初めて、心が定まらぬ程の幸せを味わった。

薫はそのまま順調に出世して、四年前の春には、四十八歳で女ながら小学校の校長にな

った。

幼い頃から勉学に秀でてしつかり者の薫は、カツの自慢の子供だった。薫の名を口にする

ツの顔は自然と綻んだものだ。

私が苦しんでいるなら、薫は毎日でも駆けつけ

てくれるはずだ。薫は理性に優って世渡りが

上手なだけでなく、優しさにも溢れた子なのだから。だが、私の意識がなくて何も分からぬ状態

と思えば、責任ある仕事と二人の子供のいる主婦で忙しい薫が来たくないのは当然のことだ。カツはそう思っていた。

峰子もまた、勉学こそ秀でていないが、幼い頃から器量がよく、要領のいい子だったので、どこに

いても存在感のある子供だった。今は、こちら辺りでは知らぬ人のない会社の、社長夫人だ。

烏御殿と巷の人から言われている豪邸ができた時のパーティの華やかさは、今もカツの臉に

焼きついている。一流のホテルからシェフやコ

騒々しい限りだったが、社長をしている亭主に

は先見の明があるのか、それともただ単に欲に駆られてがむしやらなだけなのか知らないが、会社

は不況で潰れた企業を乗っ取り益々大きく発展している。

二人の息子はもちろん峰子の亭主の会社に勤めている。もちろんというのには、他に雇ってくれる

ところなどあるかいな、という意味もあるが、二人は阿呆のくせに自分に益になることだけは、よく

知っているのだ。

警察に何度も補導されていた息子は嫁をめぐり屋敷の隅に居を構え、今では三人の子供がいる。

時も場所も弁えず、たえず口の中でぶつぶつ

呪文を唱えるように言っていた不気味な次男も
何とか嫁を貰い、近くにこじんまりした家を建て
て二人の子供を育てている。家の中が騒々しいの
は昔以上で、何が起きてても不思議でないような
不穏な家だ。常に黒い噂が絶えないので烏御殿
などと言われているのだろうが、金で繋がってバ
ランスが取れているのか、何とか無事に日々が過
ぎている。有り余る金に物を言わせて取り繕っ
ているから傍目は立派な家庭だ。中に入っている
いろあるのはどこの家庭でも同じなのだから。そ
う思って、とりあえず立派に構えている峰子の家
庭に、カツは不安を抱きながらも満足していた。
峰子も薫同様、カツの自慢の子供なのだ。

「お母さん、ご存じでしょうか。信吾君、女の子
のように座っておしっこをするんですけど。女
の子とおままごとばかりしてるのはいいとしても、
これはやっぱり改めた方がいいかと思いましたが」
カツは、幼稚園の先生からそう言われた。
ありや、と思つて聞きただして、カツは驚いた。
信吾には、自分は男だという自覚がまるでなかつ
たのだ。そういうことは改めて教えなくても
自然に分かるだろうと思つていたのだが……と、
カツは苦笑いを浮かべた。
カツはその年代の人間には珍しく、男尊女卑の
思いがなかったのです。信吾に男の子でしょ、と姉
や妹と違う扱いを一切しなかった。それが

それに引き替え！ カツはちよつと顔を曇らせ
て、信吾を思つた。

男というものは誰でもそうなのか、それとも
信吾は特別なのか。カツは未だに我が子ながら
信吾がどういふ人間なのか分からない。
優しい子だと高を括っていると突如凶暴にな
つたり、凶暴な子だと身構えていると情の深い
所を見せたり。男気もあり情もあり、扱いに
くいがこれはもしかやと期待を持てばただの腑抜け
親父に納まつたり。掴み所がまるで無く、カツは
信吾には翻弄され続けている。
信吾は小さい頃、二歳上の峰子と三歳下の薫
と一緒に、いつもお人形さん遊びをしていた。

原因だろうか、あるいは、気のいい夫の清の
存在感が家の中で薄過ぎるからだろうか、などと
考えた。

信吾は、心優しく朴訥で、順応性や協調性
に富み、自己主張をあまりしない良い子だが、い
かんせん鈍重だ。とカツは信吾を分析し、度々
苛々させられたが、悩まされることは、思春期ま
でほとんど無かった。

峰子や薫のように、人の機嫌を取ったり機転
の利いた行動こそできなかったが、些細なことに
泣くでなし怒るでなし文句を言うわけなし。
学業でも、妹のように際だってこそいないが、
カツが悩まなければいけないほど劣っているわ

けでもなく、極めて凡庸で、影の薄い、気の良
い子ども。両親に従順なのはもちろんだが、
おしやまな姉や妹にまで、いつもいいように振
り回されながら遊んでいた。

(以上8月26日放送分)